

The Bulletin of the Faculty of Global Communications

Cosmos



同志社大学グローバルコミュニケーション学部機関誌

Vol.1

2012年3月

cosmos ['kɒzmɒs]

—①よく秩序づけられた宇宙。思考体系。

②キク科の観葉植物。

…花言葉 「調和」

cosmo- ['kɒzməʊ]

—（接頭語） 世界や宇宙に関する。

私は一つの可能性です。

私たちは無限の可能性です。

限り無く広がる世界の中で

調和をもたらす存在に成らんことを願い

これを題名とします。

References

Oxford Dictionaries. (<http://oxforddictionaries.com/definition/cosmos>)

流 希望 海 個 自 会
忙 界 実 進
道 進

Cosmos

Vol.1

動 漢 未 樂 交

笑 努 空 輝 友 際

— これらの漢字は、GCの学生たちが、
グローバル・コミュニケーションを
漢字一文字で表したものです。—

Cosmos 発刊に寄せて

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部機関誌 *Cosmos* 第1号をお届けします。

2011年4月に、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部の発足と同時に、学部教員と在学生会を会員とする、同志社大学グローバル・コミュニケーション学会が設立されました。この機関誌は、学会の活動の一環として、学部在学生会が学びの成果を発表し、学生と教員が共に発信・交流しあえる場となることを目指して作られたものです。

この冊子の企画立案から取材、記事執筆、編集にいたるまでの全ての作業は、学生によって行われました。機関誌を作成するにあたり、学生の編集委員を募ったところ、各コースから多くの学生が手をあげてくれました。学生たちの積極的な姿勢とやる気には目を見はるものがあり、教員は学生との合同企画会議に参加し、原稿が出揃った段階で助言を与え、加筆修正を促すにとどまりました。

グローバル・コミュニケーション学部はまだ1期生しかおらず、学生にとっては全てが初体験という状態で、また昨年10月から2月までという限られた期間での作業でした。しかし学生たちは、試験等で忙しいなか、協力しあって、自分たちの「今」を発信してくれました。内容・表現等に未熟な点はあるかと思いますが、お読みいただき、今後の成長のための暖かいご叱正を賜るよう、お願いいたします。

2012年度には新入生を迎え、日本語コースの2年次生は日本でさらに研鑽をつみ、英語コース・中国語コースの2年次生は海外へ旅立ちます。今後の学びと経験を通じて彼らが成長するとともに、この機関誌も内容を深め、成長していくことを願い、発刊の辞とします。

2012年3月

同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
紀要編集委員長 山本 妙

表紙デザイン 後藤 友莉
内表紙デザイン 谷口 綾

Cosmos 第1号

目次

学部紹介

- グローバル・コミュニケーション学部とは 4
- グローバル・コミュニケーション学部の行事 8

アンケート調査から考える

- リアル・スコープ!～GC学生の生の声～ 12
- あなたにとってグローバル・コミュニケーションとは?
～他学部生の意識調査～ 26

インタビュー

- Real GC's Voice 30

比較文化論～GC学部生の視点から～

- 中国文化をよりよく理解するために 38
- 日中のトイレに見る多様性 41
- イギリスコメディー視聴のすすめ 43

GC学部の学生が考える「グローバル・コミュニケーション」とは

グローバル・コミュニケーション学部とは？

グローバル・コミュニケーション（GC）学部が発足して1年。教員・学生が一緒になって作り上げてきたGC。それはいったいどんな学部なのか？実際にはどんなことを学んでいるのか？そういった疑問にお答えするため、学部1期生である私たちが学生の目で見えたGC学部を紹介していきます。

グローバルコミュニケーション（GC）学部カリキュラムのポイント

- 外国語の「話す、聞く、書く、読む」能力を強化するため、少人数クラスが編成され、体系的・段階的なカリキュラムのもとで実践的なコミュニケーション能力を身につけることができます。
- 英語コースと中国語コースでは2年次から3年次にかけて1年間の留学が必修となっており、英語コースではアメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの英語圏5か国13校、中国語コースでは中国と台湾の3校の大学の中から留学先を選択することができます。
- 日本語コースは外国人留学生を対象としたコースです。日本語能力の習得だけでなく、日本の文化・社会を直接体験することで、日本文化への理解を深めることを目標としています。
- 3・4年次ではそれぞれの海外経験や学習内容を活かして、英語・中国語・日本語コースの境界線を越えた、グローバル・コミュニケーション学部全体でのセミナープロジェクトが行われます。3つのコースの学生が協力して、国際会議や文化交流などのプロジェクトを企画、立案、運営します。

私たちから見た GC 学部の特徴

- 留学に備えて、課題が多く出されます。しかし、その課題もやらされるのではなく、自ら意欲的に取り組める環境です。自習室などでTOEFLのスコアアップのために黙々と勉強している姿や、プレゼンに向けて必死に準備や練習をしているのを見ると、自分も刺激を受けもっと頑張ろうと思えます。帰国子女から海外経験がない人までいて、みんなが互いに刺激し合いながら切磋琢磨し、仲よくGC Lifeを謳歌しています。
- 大学にはたくさんの方がいて、いっぱい友達を作ろうと思っている人は、GCは学部人数が少なく授業もほとんどが少人数制クラスなので「全然友達できひんのちゃうんけえ」とお思いかもしれませんが、その分かえって学部みんなと仲良くなれ、高校のホームルームのように一体感があります。
- 香柏館の中にはGC学部生専用の自学自習室が設けられています。GC学部の学生なら誰でも自由に利用することができます。授業の合間や授業終りに、みんなで勉強したり、行事などの打ち合わせをしたり、もちろんパソコンもあるので調べものをしたりと楽しい一時を過ごすことができます。しかし、もちろん、ひとりで黙々と勉強されている方もあるので、くれぐれも騒ぎすぎにはご注意ください。一度、お試しあれ。



自習室

各コースの授業紹介

それでは、各コースの1年次ではどんな授業が行われているのか、各コースの学生が紹介します。

★英語コース

1年次には、週2回のCommunicative Performance、週1回のProgress in Reading、Progress in Writingという英語の四技能を養う授業の他、英語圏に留学するために必要とされるTOEFL-iBT対策、Study Abroad（留学）対策の授業、英語圏や日本の文化について英語で学ぶ必修講義科目などがあります。第二外国語の授業は週に三度あります（中国語、フランス語、ドイツ語の中から1つ選択）。

英語コースの授業をいくつか取り上げてみよう！

◆ Progress in writing

この授業では、主に criterion というライティングツールを用いて、英語でエッセイを書くという課題をこなします。一つのトピックを与えられ、300～400語のエッセイを書き、文法や語法、スペル、文章構成などがコンピューターで採点されます。春学期には、毎週この課題が課され、秋学期にはファイナルプロジェクトとして、1,500～2,000語のエッセイが課されます。



S.A.さん

毎週課題を提出し、採点を受けることで多少のプレッシャーはありましたが、今思うと、そのおかげでタイピングが早くなり、何より英語で文章を書く能力が身についたと感じます。数を重ねるごとに効率よく書けるようになり、点数も徐々に上がってきて、春学期の最後のほうにはクラスの学生全員が満点を取ったこともありました。

◆ Communicative performance

リスニングとスピーキングの力を養うための授業です。この授業では、主に留学先で必要となるプレゼンテーション能力が身に付きます。具体的にはパワーポイントを使用して資料を作成し、それを使いプレゼンテーションを行います。それだけでなく、少人数制で週に2度の授業なので、先生と生徒との距離も近く自然と英語での日常会話ができるようになります。



S.T.さん

僕のクラスではクイックスピーキングというものが行われます。トピックを与えられて、15秒で考えて1分間、ペアの人と英語でそのトピックについて会話をします。今までは頭の中で文法を並べてからしか言葉を発することができませんでしたが、何か言いたいことを伝えるには文法などはさほど関係なく、とにかく英語を発することが大事だと感じました。今では文法を頭の中で思い浮かべるよりも、単語をすぐに発するようになりました。

◆ Threshold Seminar

週に一度、2年次からの Study Abroad（留学）対策の授業です。春学期には2年次に自分の行きたい大学について調べ、留学先が決まった秋学期には国別、または学校別に細かく振り分けられ、留学に向けて入念な準備をしていきます。



O.T. さん

私は UC Davis に行きます。この授業ではカリフォルニアの文化や歴史について学びました。特に私は、「カリフォルニアの銃」についてリサーチし、プレゼンをしました。また、留学中のリスク管理や授業の受け方なども学び、しっかりとした留学の準備を整えることができました。

課題や語学の授業はとても大変ですが、しっかり授業に参加し、課題を提出すればその努力に見合った評価が得られ、やる気や自信につながります。SA 先では、この一年間 GC で学んだことを十分に生かして英語力を向上させたいです。そして、たくさんの人に出会い、日本ではできない経験をすることで視野を広げ自分を成長させたいと思っています。（眞田・菅井・嶋津）

★中国語コース

授業のほとんどが必修で、第二言語も英語と決まっています。（第三言語を取ることも可能です。）

◆中国語の授業としては「会話」「講読」「作文」とそれぞれ週2コマずつあります。

まず初めの2～3週間は各授業で発音を徹底的に身につけます。その後、「作文」では日本で出版されている文法書を使って、発音と基礎的な文法を学びます。毎回宿題と小テストがあり、気が抜けない授業です。

「会話」では留学生用のテキストを使い、ネイティブスピーカーの先生に実践的な中国語や中国の文化を教してもらっています。本文の内容を暗記したりなど、今までの受験英語ではあまりしなかったようなとても実践的な授業だと思います。ほかの授業に比べて実際に話す時間が多いので、人気がある授業です。「講読」も「会話」と同様に留学生用のテキストを使っています。この授業は主に文章を読解して正確な日本語に訳せるようになることが目標ですが、他の授業で習った文法事項を応用して使わなければならない、とても難しいです。しかし先生の説明をしっかり聞けば、理解は一層深まり、上達も速いと思います。



授業風景

◆語学以外の授業では「演習」という授業が週1コマあります。これは、中国の文化・歴史・政治・経済などを調べ、レジュメにして発表するものです。具体的には、先生から課題図書が与えられ、その中で気になったところを各自調べて、レジュメにして発表します。その発表に対して質問したり、意見を交換したりします。



I.S.さん

春学期は新聞を読んでいて、中国に関する記事を見つけ、中国の現在の経済状況を調べ、中でも中国のバブルについて掘り下げて調べました。また秋学期には課題図書『あの戦争から遠く離れて』（情報センター出版局 2007年 木戸久枝）を読んで、その内容から満州事変に興味を持ちました。それをもとに、調査事項を関東軍や日中戦争にまで派生させて調べました。さらに秋学期の演習では、中国語コースの中で最優秀賞を学生の投票で決めました。これに選ばれた人（ペア）は、中華料理一万円分の食事券という豪華なプレゼントをもらえました。皆さんこの授業は一生懸命勉強しましょう！

このように授業のほとんどが「中国」に関係するもので占められており、「中国」のエキスパートになるためには最適な学部だといえます。（家田）

★日本語コース

日本語コースは、外国人留学生を対象にし、日本社会や日本文化を理解するとともに、日本語のコミュニケーション能力を確実に身に付けることを目的としています。

授業の構成としては、全学共通教養教育科目以外の専門科目は約授業全体の7割を占めており、この専門科目が、必修科目と選択科目の二種類に分かれています。

- ◆必修科目の中には、日本語のコミュニケーション、ライティング、リーディング、そして日本語の文法の授業があります。「日本語」という言語に関する基礎知識を学びながら、日本語の聴解力、会話力、読解力、文章力を高めることができます。教科書はすべて日本で出版された本を使用しているため、本場の日本語が自然に身に付きます。授業はすべて少人数制で行われるので、学生一人ひとりに十分な発言機会が与えられています。



K.Y.さん

「日本語の構造2」の授業では毎月一回、自分の日本語の発音を録音してどの部分を間違えて発音したのか振り返る時間がありました。最初は自分が録音した声を聞いて振り返るのが恥ずかしかったです。でも、間違えた部分が正しい発音になるまで何回も繰り返して録音したのが、今思うと、高い効果をあげたと思います。また、毎月日本語の発音に対する目標を立てて、それを達成するために授業で学んだことを土台に、自分なりに復習したり、シャドーイングの練習をしたりして、みんな頑張ったと思います。

- ◆選択科目では、学生一人ひとりが自分の興味のある分野を選択することができます。将来通訳になりたい、日本語教師になりたいなどの、学生のさまざまな要望に応える内容になっています。
- ◆3年次には専門演習の授業が設けられており、2年次までに勉強した知識や技能を用いて、より高度な日本語を身に付け、運用できるように実践的な練習をします。

日本語コースの先生方は留学生の学習に関わるだけでなく、生活のさまざまな悩みの相談にも乗ってくださり、まさに学生のよき師よき友です。幅広く、内容が豊富な日本語必修科目に加え、自由に選択できる外国語科目と共通教養科目も充実しており、日本語コースの留学生たちは、グローバル化が進んでいる現在において、グローバル・コミュニケーション能力を活用できる国際人になることを目指しています。（劉）

グローバル・コミュニケーション学部の行事

2011年7月のオープンキャンパスには、私たち学部1年生も参加しました。10月にはグローバル・コミュニケーション学会と学部広報委員会共催によるグローバル・コミュニケーション学部開設記念シンポジウムが開催されました。

7月 オープンキャンパス

7月24日に行われたオープンキャンパスでは、教員による説明、模擬授業のほか、GC学部の独自企画として、学部1期生による『Welcome to GC!! (学部紹介・実践授業・入試体験談・個別相談)』を開催しました。たくさんの方にご来場いただき、より多くの人にGCのことを知ってもらえたと思います。



【学部紹介】

各コースの学生が、学部の紹介を行いました。



【入試体験談】

どんな時期にどんな勉強をしたかなど、自身の入試の体験を語りました。



【実践授業】

学生が教師役のモデレーターとなり、「求められるコミュニケーション力とは」というテーマで、参加者と共に実践的な語学力とは何かということについて考えました。

【個別相談】

一般入試、推薦入試等により GC 学部入学を考えている人たちの個別の質問に答えました。



会場風景

10月29日、同志社大学今出川キャンパスにてグローバル・コミュニケーション学部開設記念シンポジウム「留学の先にみえるもの—世界へ通じる対話力」が開催されました。日本でタレントとして活躍するダニエル・カールさんをお招きしての基調講演「グローバル時代を生きる」、そして教員と学生によるパネルディスカッション「留学への期待と目的」が行われました。

基調講演 「グローバル時代を生きる」

ダニエル・カールさんは講演のなかで、「三十数年前に留学生として日本に来たときは、外国人が珍しく、歩いているだけでとても驚かれた。車がわき見事故を起こしたり、パトカーがサイレンを鳴らして飛んできて、警察署で質問攻めにあうほどだった」と自らの留学体験を語られました。また、日本人が外国人に話す際には、きっちりと主語を用い、代名詞や婉曲表現、謙遜表現は避けたほうがいい、そうしないと外国人にはなかなか理解できない、というアドバイスをくださいました。



【ダニエル・カールさん】
米・カリフォルニア州出身。
日本の翻訳家、実業家、タレント。株式会社DOMOS社長。

パネルディスカッション 「留学への期待と目的」

文化、価値観、グローバル経済のダイナミズム……。海外留学することで、みえてくるものとは何なのか。また世界を舞台に活躍するために必要なものとは何なのか。グローバル時代の生き方について、ダニエル・カールさんと、GC学部教員の竹田宗継准教授、ポール・カーティ助教、GC学部生の近藤美佳さん（英語コース）、黒岩徹也くん（中国語コース）、姜有那さん（日本語コース・韓国出身）の学生代表三人を交えて考えました。

近藤 ● 高校2年のときにニュージーランドに留学したときは、語学力向上以外は考える余裕はなかった。今回の留学では、アカデミックなことにも挑戦し、現地の同年代の方々と勉強したり、プロジェクトを立ち上げたり、私生活でも仲良くなって、国際人になる夢に近づきたい。

黒岩●中国語はゼロからのスタートなので、今、留学に向けて、発音の基礎から徹底的にたたき込まれている。僕は留学も親元を離れるのも初めてなので不安もあるが、留学先での出会いや経験がこれからの人生に大きな影響を与えると期待している。世界中からやってくる留学生と交流し、「世界に友人を多く作る」という夢の第一歩にしたい。

姜●母国の高校を卒業後、テキストでは学べない日本の若者言葉や国民性に触れたくて来日し、語学学校を経て入学した。将来、海外と取引する仕事に就きたいので、ビジネスレベルの日本語はもちろん、文化の違いをしっかりと理解し、相手の国に合わせて仕事を工夫できる力を身に着けたい。

カーティ●留学は新しい発見をもたらす。若い人が母国や家族のもとを離れて留学することは、より豊かで実りある人格の形成につながる。ダイヤモンドの輝きと優雅さは、どれだけ多くのカット面があるかによって違って来る。留学先でたくさんの経験を積み、新たな自分の面を増やして、輝きを増してください。

カール●どこに留学するにも先入観を持たず、白紙の状態で行ってください。留学生が一番やってはいけないのは、“やらず嫌い”。何事も7回試みなさい。気が進まないことも、7回試してみる。7回やってダメなら、初めて「いやだ」と言っている。留学したら、なんでもチャレンジすること。結果的に嫌な経験になっても、それが必ず自分のためになる。

最後に、モデレーターである竹田先生が「留学はそれ自体が目的ではなく、様々な経験を通して自分の視野や価値観をグローバルな土俵で見直し、広げることであり、地球市民に近づく一つのステップである。世界に学び、世界に貢献する人材が一人でも多く育つよう、我々も努力を重ねていく」と締めくくられました。



【パネルディスカッションの様子】

リアル・スコop!

～GC学生の生の声～

みなさんはグローバル・コミュニケーション学部と聞いてどのようなイメージを持っていますか？ 英語や中国語などの語学をやっている、留学生が多い、留学が必修…など、様々なイメージがあるかと思います。GCとは何をやっている学部なんだろう？ そんな漠然とした疑問やイメージを、今回、アンケートを基にヒモ解いていこうと思います。

【アンケート情報】

実施期間：12月中旬～下旬

対象者：グローバル・コミュニケーション学部 1回生

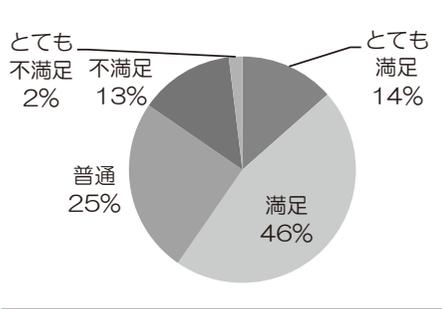
有効回答：74% (104/140)

それでは、まず学習面について、コースごとに結果をまとめてみました。コースごとに授業や学習に対する考え方に特色があるようです。

学習面 ～ 英語コース

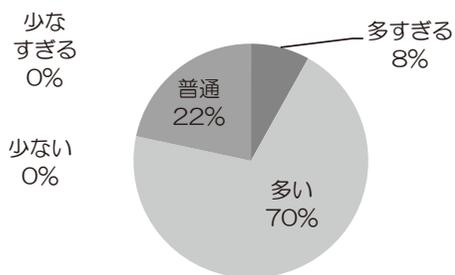
英語コースはその名の通り「英語」を主に学んでいます。授業もリーディングやライティングといった基礎的なものから、英語圏の文化や日本の文化といった応用的なものまで幅広く受講することができます。その中にはすべて英語で行われるものもあり、GCの学生は1年を通してどっぷりと英語につかっています。そんな英語漬けのGCの学生はどんな生活を送り、どんなことを思っているのでしょうか。

Q1 GC学部に満足していますか？



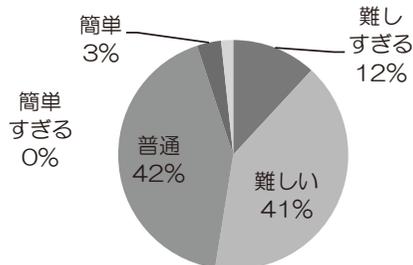
GCの1年次は、ほぼすべての授業が必修（一般教養は1つ or 2つ）です。また、そのほとんどが2年次の留学に向けた“話す・聞く・読む・書く”の基本的な授業が多いので、一般教養やその他に割く時間がほしいという意見もあります。

Q2 学部の課題は多いと感じますか？



Q1にあるように、ほとんどが必修であるため、課題の提出が多いです。例えば、Progress in WritingではCriterionと呼ばれるソフトに最低でも週に1回は300～400語程度のエッセイ（英語）を提出しなければならず大変ですが、知らず知らずのうちに英語が身に付くというメリットがあります。

Q3 授業は難しいですか？



GCの授業内容は、教授によって多岐にわたります。すべて英語で行う教授もいれば、学生がプレゼンをする授業もあります。実際に、半数近くの人が難しすぎる・難しいと答えています。しかし、レベルの高い授業だからこそ、それを理解できたときの達成感はこの学部の最大のメリットの1つと断言していいでしょう。

Q4 あなたの好きな授業、面白いと思う授業（先生）とその理由を教えてください。

1位 Communicative Performance

1番多かったのはCommunicative Performanceです。この授業では、プレゼンやディスカッションなどを英語を使って行うもので、皆さんの考える、いわゆる「英語をやっている」というような授業です。実際に、「英語を話す機会が多い」や「リスニング力がつく」などを理由に、この授業を選ぶ学生が多くいました。中でも、Dale, Terry, Paul先生といったネイティブ・スピーカーの先生に人気が集まりました。

1位 Communicative Performance

…speaking

2位 Introduction to Japanese Culture

…lecture on Japanese culture

3位 第2外国語（中国語・フランス語・ドイツ語）

…second foreign language

番外編 竹田先生の不定期開催のレクチャー

…lecture from business viewpoints

2位 Introduction to Japanese Culture

意外に人気を集めたのが Introduction to Japanese Culture です。これは、アメリカ出身の Thorsten, Foreman 両先生が私たち学生に「日本文化」をレクチャーするものです。例えば、「おりがみ」や「黒澤明」など日本人として知っておくべき知識を学びます。これを選んだ学生たちも「日本文化を自ら調べる機会がある」や「英語で日本文化を学べる」と、大好評です！！



3位 第2外国語（中国語・フランス語・ドイツ語）

GCの学生は第2外国語を中国語・フランス語・ドイツ語のなかから1つ選択し、学んでいきます。英語+αの語学力が求められる中で、自分の将来や興味にあった言語を選択します。その中でも、フランス語の伊勢先生は「優しくてわかりやすい」「物事をよく知っている」と人気で、中には「ステキ♡」と言い放つ学生もいました。全体的には「新しい言語を学ぶのが楽しい」という意見が多くあり、やっぱりGCは言語に興味を持ち、チャレンジ精神を持った人の集団だなと感じました。



番外編 竹田先生のレクチャー

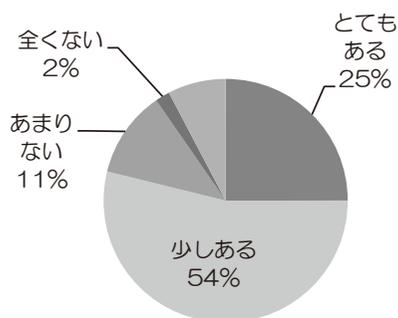
こんな意見もありました。GCの教授の1人である竹田宗継（パナソニック出身）先生の不定期に行う‘ビジネス’や‘海外でのマナー’などの授業は、「説得力があり、ためになる」と学生に人気がありました。不定期開催なので、いつ行われるかわからないところがいいのかも・・・



MECEとは、Mutually Exclusive and Collectively Exhaustiveの略です。

(左写真：竹田宗継 先生)

Q5 GCは何を学ぶべきですか。またその理想と実際の学びには差がありますか？



理想と実際の学びの差

学びたいこと

経済や政治といった
実際に使える分野

実際の学び

読む・書く・聞く・話す
といった基本スキル

全体の4分の3が、理想と実際の学びに差があると感じているようです。英語コースのカリキュラムを見てみると、1年次は、2年次の留学に向けた「読む」「書く」「聞く」「話す」などの基本能力の習得がメインとなっています。そのため、1年次の学びを「高校の延長のようだ」や「発展的でない」と感じている学生が多いようです。しかし、基本能力を身につけた留学後は、政治や経済といった自分の興味のある分野を「英語で学ぶ」ことができるようです。1年次は飛躍するための大事な基礎づくりの年と言えるでしょう。

Q6 留学プログラムに対して期待することはなんですか？

GCの学生は、留学を通して多くのことを得ようと望んでいます。具体的には英語のブラッシュアップをはじめ、各国からの留学生とのコネクション作りや、国際的教養の育成といった声が上がっています。

そのために・・・

- ・ 様々な activity への参加
- ・ 自分がやりたいことの発見
- ・ 環境の変化・自己改善

といったことを実践しようとしているようです。

第1位 英語力のブラッシュアップ

…to improve English ability

第2位 コネクション作り

…to make friends from all over the world

第3位 国際的教養の獲得

…to become a sophisticated person

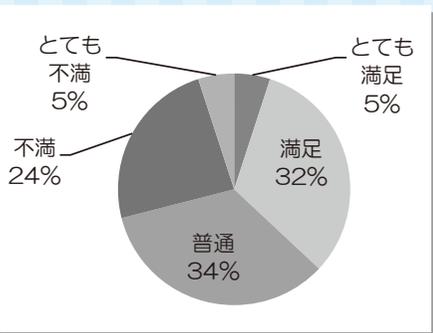
GC 学部英語コースでは、より実践的な英語の獲得を目標に日々の勉学に励んでいます。「言語の壁が相互理解の障害になるべきではない」とよく言いますが、英語コースの学生はその障壁を取り除く橋渡し役としての役割が期待されています。その勝負の年がいよいよ迫り、1期生は留学という飛躍の1年を迎えます。この1年を通してGCの英語コースがさらなる発展をみせることを期待したいです。

学習面～中国語コース

中国語コースは、中国語を基礎から徹底的に学んでいきます。また中国語だけでなく、英語も第2外国語として履修します。また語学だけでなく、学生が中国の近現代史や文化に関する図書を読み、関心のあった事柄を自身でさらに調査し、発表するといったゼミ形式で行われる授業も1回生のうちからスタートします。よって中国語コースの学生は、中国語の語学はもちろん、中国の歴史や文化についても日々学んでいます。

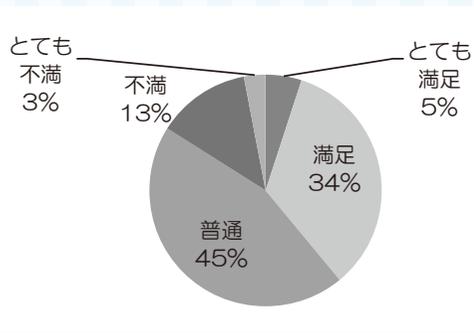
さて、このように日々中国に触れながら学んでいる中国語コースの学生は GC 学部や、普段の授業、さらには留学についてどのように考えているのか、実際に学生に行ったアンケート調査の結果から、中国語コースの本音をここで紹介したいと思います。

Q1 GC 学部に満足していますか？



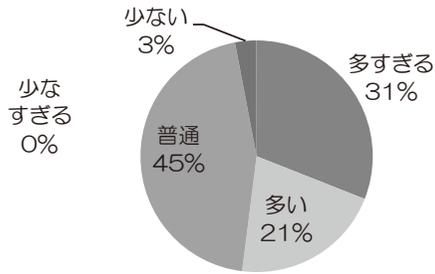
中国語コースでは、入学して約1年になりますが、まだ GC 学部がどういうものなのか、またそれを満足か不満かどうか一言で判断しがたいと考えている学生が多いようです。また、中国語コースはまだ留学の準備も本格的には始まっていないので、GC 学部がどういう学部か、はっきりとした実像が見えていないのが現状のようです。

Q2 コース必修の授業に満足していますか。



GC 学部は他学部以上に、必修授業が多く、そのほとんどが語学、中国語の授業です。中国語も英語の授業の Reading (講読)、Grammar (作文)、Speaking (会話) のように、3つの分野に分けて勉強します。中国語コースの学生の多くが初めて中国語を学ぶので、留学に行く前準備として、この必修授業では徹底的に基礎から中国語を身につけられるようになっています。

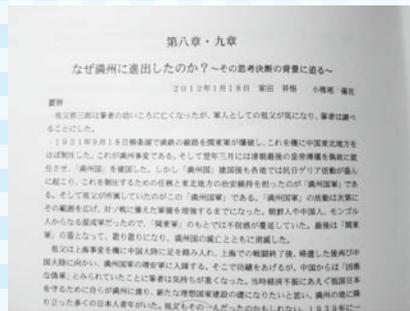
Q3 学部の課題は多いと感じますか。



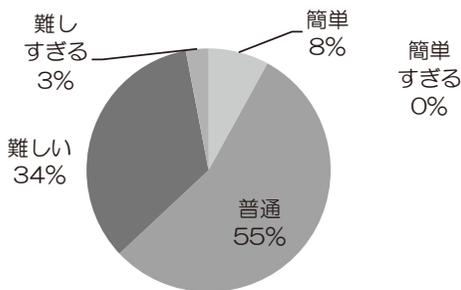
また中国語コースには語学の必修授業のほかに、中国の歴史（特に近現代史）や文化についての書物を読み、またそこから自分が興味を持った事柄について調査し、授業内で発表する、学生が主体となって進められる授業、いわゆるゼミがあります。そのゼミで発表する**レジュメ（調査報告）**を語学の課題と並行して定期的作成していかなければならないので、学生は少し大変ですが、みんななんとかそれをこなしていているようです。

レジュメとは…？

レジュメとは、一般的には授業で配布されるプリントのことです。この基礎演習の授業では自分たちでこのレジュメを作成し、印刷し、先生や学生に配布し、発表します。次の写真は実際に私たちが授業用に作成したレジュメです。



Q4 授業の内容は難しいですか。



前にも述べたように中国語コースの学生の半分以上が初めて中国語に触れ、イチから中国語の勉強をしています。半分以上の学生が授業の内容は難しすぎず、簡単でもなく、普通と回答しています。これは、どの授業も発音や基礎から丁寧に教えてもらえ、またわからないところがあっても、クラスが少人数なので先生に質問しやすいというGCならではの特徴と関係しているのではないかと思います。

Q5 あなたの好きな授業、面白いと思う授業（先生）とその理由を教えてください。

ここでは人気の授業をランキングにして紹介したいと思います！

1位 基幹中国語会話

1番人気の高かった授業が、会話の授業でした！ この授業は、ネイティブ・スピーカーの先生による授業で、実践力が身につけられるというのが特徴です。またこの会話の授業がどの授業よりも少人数でクラス分けされていて、1クラス10人程度で行われるので、どのクラスも和やかなムードで授業が進められているようです。「ネイティブ・スピーカーの先生のきれいな発音が聞けることができる」、語学のことだけではなく、「中国での体験談が聞けて面白い」と、ネイティブ・スピーカーの先生ならではの授業が学生には好評のようです。

1位 基幹中国語会話

2位 基幹中国語作文

3位 基礎演習

番外編 一般教養科目



2位 基幹中国語作文

会話の授業の次に人気があった授業が、作文の授業でした！ 作文の授業は、Writingというより、ここでは主に中国語の文法を学習していきます。作文の授業が人気だった理由として、やはり「基礎固めができ、予習や復習にもなる」という声が多くみられました。そのほかにも「先生が丁寧でわかりやすい」という意見もありました。



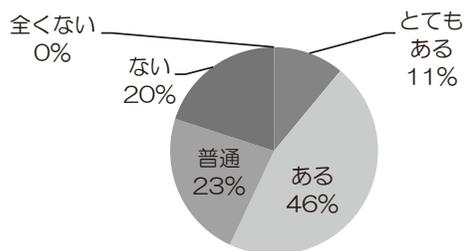
3位 基礎演習

次に人気があったのは、いわゆるゼミと呼ばれる基礎演習の時間でした。Q3の説明でも述べたように、ここでは学生が主体となって授業が進められます。学生の中には「ほかの人の発表を聞くのが面白い」「自分で調べることで知識の定着が早い」という声があり、ゼミ特有の良さを実感している学生が沢山いるようです。

番外編 一般教養科目

ここでは中国語コースの学生が中国以外にどのような分野に関心を持っているのか、紹介したいと思います。まず、一般教養科目ではありませんがハングルを履修している学生が多くいるようです。中国語コースの学生は中国以外のアジア地域にも興味をもっているようで、中でも韓国、朝鮮は日中関係にも大きく関連してくるので、特に関心が高いようです。そのほかには貿易論や法学、宗教学、経済学というように、GC生は様々な分野にアンテナを張り、「語学+α」をこういった一般教養科目などから吸収していているようです。

Q6 GCは何を学ぶべきですか。またその理想と実際の学びには差がありますか。



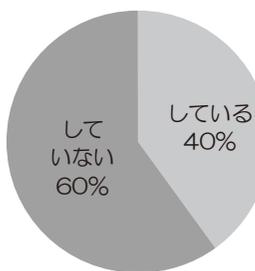
やはり学生のほとんどが、“語学+a”を意識しているようです。そして、その+aを修得するために、基礎演習や一般教養科目、または課外活動などで発見していこうとしているようですが、しかしまだどういう方向で学んでいきたいのかしっかり定まっていないのが現状のようです。

Q7 留学プログラムに期待することは？

さすがGC生、言語の習得だけでなく、現地の人との“コミュニケーション”、交流にも期待しているようです。

- ・異文化の中で、メディアを通さない生の体験がしたい
- ・中国語のレベルアップ
- ・中国人の友達をつくる
- ・現地でコネクションをたくさん作る

Q8 留学プログラムに向けて何か準備していますか？



最後に、今年の秋学期から始まる、Study Abroadについて質問してみたところ、半分以上の学生がまだ、留学の準備を始めていないようです。現時点（2011年12月）では、まだ留学の行先もそれぞれ決定しておらず、具体的な準備を始められないのが現状です。

一方で「準備をしている」と答えた人がどういうことを始めているかということ、まず、パスポートを持っていない学生はパスポートの申請受け取りに行ったり、中国語を勉強することが留学準備だと回答する学生もいました。

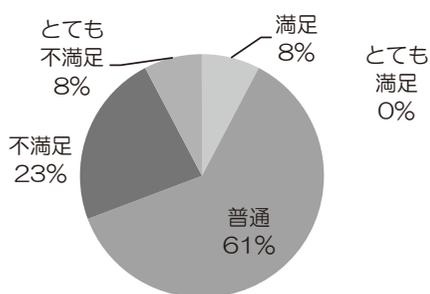
中国語コースには他の2コースとはまた違った、中国語コースならではの特徴があり、それに伴って学生の特徴もまた変わってきます。それには、中国語という言語を初めて学ぶことから始まり、さまざまな背景が関連していると思われます。そしてこれからStudy Abroadに向けてさらに学生の意識も高まり、同時に中国語コースだけにとどまらずグローバル・コミュニケーション学部がさらに活発な学部となっていくことに期待したいです。

学習面 ～ 日本語コース

グローバル・コミュニケーション学部には、中国、韓国、アメリカからの留学生も在籍しています。私たちは2011年4月に、ビジネスマン、国際人、通訳、外交官など、皆がそれぞれの夢を持って、GC学部の日本語コースに入学しました。GC学部で、将来役に立つものを身に付けたいという希望を持ちつつ、1期生としての大学生活が始まりました。

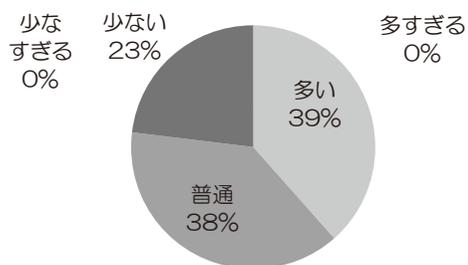
それからもうすぐ1年がたちますが、この1年間を振り返るアンケートをとってみた結果、様々な感想が出てきました。そこで、私たち日本語コースの中身をアンケートや学生の生の声とともに見ていきたいと思います。

Q1 GC学部に満足していますか？



日本語コースの中では、他のコースと違い普通と感じる学生が多く見られました。「普通」と感じる理由は、1年次に履修可能な授業のほとんどが必修科目で、好きな授業を履修できる時間があまりないからです。それに、皆がある程度日本語能力があるのに、基礎的な日本語の授業もまだ、取らなければいけないという意見もあります。

Q2 学部の課題は多いと感じますか？



日本語コースの学生も課題の多さは感じているようです。例えば、日本語コミュニケーションの授業はほぼ毎週本の課題のミニプレゼンが発表があるので、学生が自主的に調べて、発表します。また、留学生にとって、レポートも一つの難題であり、最初の時は、少し大変でしたが、時間が経つにつれて、皆慣れてきたようです。また、それぞれの学生の日本語能力の差もあるので、課題の多さの感じ方はそれぞれ違うようです。

Q3 あなたの好きな授業、面白いと思う授業（先生）とその理由を教えてください。

1位 日本語コミュニケーション

皆が話をしながら、勉強出来るので人気の授業です。授業は6人という少人数で行い、授業を聞きながら、自分の意見を述べなければなりません。また、スピーチや発表の練習により、皆の実践的な日本語能力は上達していきます。

1位 日本語コミュニケーション

2位 日本語の構造

3位 Introduction to Global Communications

2位 日本語の構造

春学期と秋学期に異なるテーマで授業が行われます。特に秋学期は日本語音声学を中心に学習し、実際に発音し、絵を見ながら日本語について学習するので、理解しやすいという意見が多かったです。この授業は、口の中の構造を学ぶことから始まり、1カ月1回の録音からシャドーイングの練習まで、課題の多い授業でしたが、皆の日本語の発音と日本語能力が向上でき、役に立つと感じる人が多かったです。

3位 Introduction to Global Communications

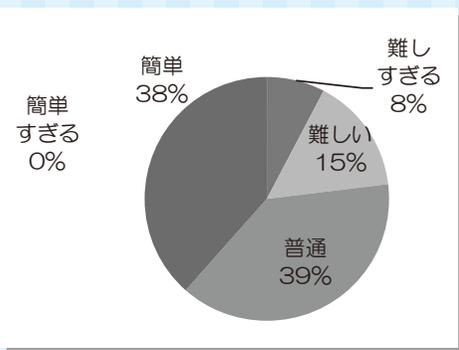
3位は、春学期に行われ、学部1年生全員が受ける Introduction to Global Communications という授業です。この授業は英語コース、中国語コース、日本語コース、それぞれの先生が、順番に授業を行いました。私たちは特にビジネス日本語の部分に引き付けられていました。また、この授業では、私たちが他のコースの日本人学生と一緒に受けることができます。そのため、大学での友達作りはこの授業から始まりました。面白い授業ですが、春学期にしか行われないので、残念な気持ちもありました。

人気がある先生

授業を受けるのは一番大変だけれども人気のあった先生は一緒でした。それは須藤先生です。コミュニケーションと日本語の構造2の授業を担当していらっしゃいます。先生は文法の1つ1つから、発表する際の日本語の発音まで厳しく指導されますが、いつの間にか、皆の日本語能力が上達していきました。

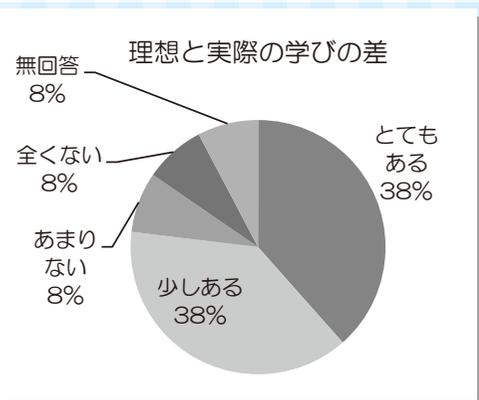
さらに、授業以外の時間に先生の研究室に行くと、先生は日本語の発音やアクセントを丁寧に教えてくださいます。厳しい中にも愛があるのが、先生の人気の秘密ではないでしょうか。

Q4 授業の内容は難しいですか？



皆がある程度日本語能力を持っているので、ほとんどの授業において問題はありませんが、日本語の専門的な知識を学習するのは初めての事なので、難しいと感じる学生が多かったようです。また、色々な場面にふさわしい会話力を身に付けるために、様々な課題が課されます。例えば、日本語コミュニケーションの授業では、面接、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションなど、私たちににとっては難しかったですが、日本語の上達に繋がるような実践的な課題をします。

Q5 GCは何を学ぶべきですか。またその理想と実際の学びには差がありますか？



4分の3の学生が「差がある」と回答していますが、Q1のように、日本の社会や文化、ビジネスなど、日本語で学習する事に興味を持っている学生にとっては、1年生では限られた必修科目しか取れないので、このような結果になりました。しかし、2年生になると、経済、ビジネス、日本の社会、文化など、それぞれの必修科目の選択の幅が多くなり、自分が好きな分野が学習出来るようになります。そうすると、皆がそれぞれの好きな科目を選んで、自分なりの方向性を見つけるでしょう。

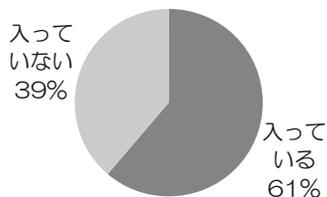
日本語コースにアンケートをとってみて、授業で皆と一緒にディスカッションする時の楽しみ、レポートを書く時の苦しみ、コミュニケーションの授業でスピーチを準備する時の大変さ、個人プレゼンテーションを完成した時の達成感など、様々なことを思い出しました。これからも、私たちは新入生や来年の授業への期待を持ちつつ、これからも頑張っていきたいです。

生活面 ～ 家コース

これまでのアンケートから、「GC は勉強が忙しい」ということがわかりました。しかし、大学生活は学部だけではありません。例えばアルバイトをすれば、学部では体験できない社会での振る舞いやルールを学べるし、部活やサークルに入ることによって多くの他学部の人と交流できます。そこで、GC の学生がどのように大学生活を enjoy しているか、全コース共通で生活面のアンケートも取ってみました。

部活・サークルについて

部活・サークルに…



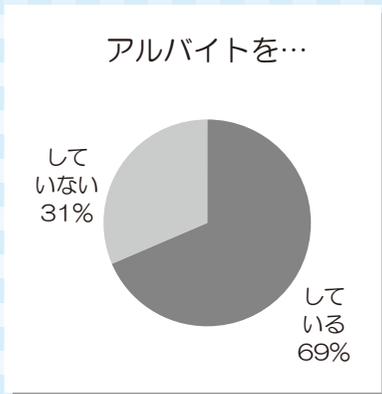
学習面で忙しい GC の学生たちですが、半分以上の人が人脈を広げるため、運動をするため、などの理由で何らかの部活やサークルに所属していました。特に友達をつくるためにサークルをしている人が多く、ここでも他人との交流に積極的な学生が多いという特徴が表れています。今年入らなかった人の中には、本当は入りたかったが時間に都合がつきそうになかったという人や、タイミングを逃したという人、また留学に専念したいので帰国してから入ろうとしている人が多数いました。

どんな種類の部活やサークルに入っているのだろう？

様々な答えが返ってきましたが、やはり多かったのは**スポーツ系のサークル**でした。バスケやテニスをはじめ、フラダンスやスピードスケートなど、高校時代には体験できなかったものに挑戦している学生もいました。また、京都散策や食べ歩きサークル、映画に関わる活動をするサークル、軽音部に入っている学生もいます。忙しい GC ですが、中には部活（馬術部など）に入って学問と両立した充実した生活を送っている学生もいました。

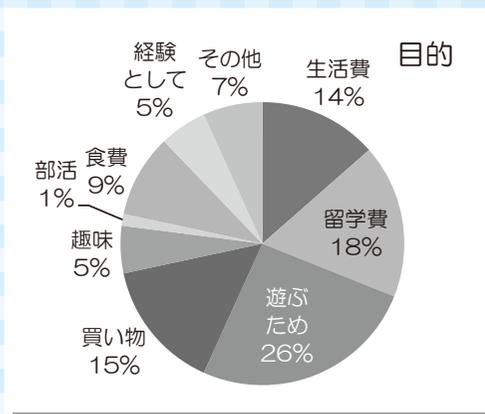
GC らしいサークルとして、**国際交流のサークル**に入っている学生もいました。詳しく聞いてみると、“ICG” という会話練習に重きを置いて活動しているサークルや、同志社が主催する国際交流ボランティアサークル、“good Samaritan Club” や “SEC A I” などの名前が挙げられました。またこのような国際関係のサークルには、今どこにも所属していない GC の学生の中にも興味がある人が多く、入るならこのようなサークルに 1 つは所属しておきたいという声が多かったです。

アルバイトについて



こちらは、部活・サークルよりも少し割合が上がって、約7割のGCの学生が勉強や他の活動の忙しい時間の合間をぬってアルバイトをしていました。やはり多いのは、塾の講師や家庭教師など、人に教える類の仕事と、飲食店で仕事でした。他にはホテルで仕事をしている学生、派遣に登録している学生もいました。仕事の種類だけをみれば、あまり他学部の学生たちと変わらないようにも思えますが、やはり人と接する仕事が圧倒的に多く、また外国人のお客さんと話す機会があると答えた人が多かったのもGCらしいところです。そのような機会があれば自ら進んでコミュニケーションをとる人も多いようです。

アルバイトの目的も聞いてみました



やはり交際費や買い物に給料をまわす学生が多いようです。しかし、経験として、社会勉強としてアルバイトをしようと思ったという学生もいました。アンケートを通して、勉強を優先し、空いている時間にアルバイトをしている人が多かったのですが、それでもそれぞれの学生が目的を持って週2～4回の割合で働いていることがわかりました。GCらしい点としては、ほとんどの学生が**勉強優先で時間を有効活用していること**、また**留学費をためるためにアルバイトをしている人が全体の2割**いることです。大学生でしか経験できないことも多く、自分のやりたいこと、やらなければいけないことの両立は難しいと感じている学生も多かったですが、この忙しい日々が充実した日々を過ごすことにもつながると思います。

これまでは、‘今’のGCについてでしたが、今度は‘未来’のGCについて報告したいと思います。第1期生ということもあり、大学卒業後の進路は未知ですが、学生たちはそれぞれがこれからしてみたいこと、また将来つきたい仕事、将来の夢について、手探りしながらもしっかり考えているようです。

大学生の間にしてみたいこと

NGO への参加や国際交流活動への参加、海外インターンシップなど、GC の特色となるものが多かったです。また留学やこれらの活動を通して、**世界にコネクションを作りたい**と思っている学生がとても多く、積極的に活動を計画する学生もいました。GC の特色として約1年間の留学はメインになるとは思いますが、GC の学生たちの回答をみていると、留学することがゴールではなく、それも世界とつながる一つ的手段として考えて、将来にむかって可能性を広げていくことが大事だと感じました。

将来の夢・就きたい仕事

まだ全然決まっていない学生も、来年留学中に見つけたいという学生もいますが、ほぼ全員が在学中に**高い語学力とコミュニケーション力**を身につけ、それを活かすことのできる仕事、世界と関わることのできる仕事をしたいと考えていることが、アンケートを通して見えました。人気が高かったのは、**航空会社や外資系企業、通訳・翻訳関係の仕事**でした。他には、**外交官**を目指している学生や、**貿易関係・出版関係の仕事**をしたいと思っている学生、**アパレル関係**に携わりたいと思っている学生がいました。

いかがでしたでしょうか？ このように私たちの学部には、様々な学生がいます。しかし、みんなに共通している思いは外国語を習得し、世界各地で活躍することなのだと言います。留学をする事が決まっている学部だからこそ、同じ志をもった学生が集まっています。そんな学生たちの中で互いに刺激しあい、高めあえる学部こそが、グローバル・コミュニケーション学部なのです。

GC 学生諸君の将来の活躍 around the world に期待！！

あなたにとって

グローバル・コミュニケーションとは？

～他学部生の意識調査～

早いものでこのグローバル・コミュニケーション学部（以下、GC 学部）が開設されてもう1年が過ぎました。第1期生はそれぞれの思いを胸に GC 学部生として2回目の春を迎え、第2期生は希望を胸にこの同志社大学に入学してきた頃だろうと思います。このように GC 学部は少しずつ伝統を重ねています。とはいえ、その知名度はまだまだ低いと言えるでしょう。私は、GC 学部とはどんな学部か、いったいどんな勉強をしているのか、聞かれることが多々あります。名は体を表す、とよく言いますが、グローバル・コミュニケーションという名はみなが思い浮かべるような明確な体をまだ得ていないようです。それならば、GC 学部は他学部の学生からどんなイメージを持たれているのでしょうか？ それを調べるために私たち編集委員は他学部生、計82人にアンケートを実施しました。その結果をランキングにまとめましたのでご覧ください。

Q1 GC 学部に対してどんなイメージを持っていますか？

- ・ “留学できる学部” と答えた人が 1/3 も！
そして学部名のグローバルから “国際的な学部” と答えた人も多くいました。
- ・ 文学部英文科とどう違うのか、分ける意味があるのか、という意見も多少見られました。
- ・ 全体的に外国語ができる、外国人が多い、という意見が多かったように思います。

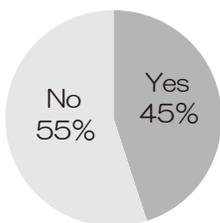
第1位 留学できる、必修 (28)

第2位 国際的な (14)

第3位 外国語を学ぶ (12)

第4位 英語ができそう (8)

Q2 大学で留学生と交流したことがありますか？ またそれはどのような場面で？



第1位 授業 (語学系)

第2位 サークル

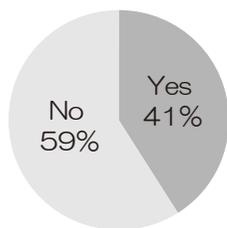
(京都研究会、ICG、EWS、政研、哲研、同志社交響楽団、軽音、プリンス、舞踏研究会、国際協力ボランティア、AIESEC)

第3位 寮

- ・ 他にも、語学パートナー、交流会、留学生ラウンジ、ボランティア (KCJS, 国際課) などがありました。積極的に動けばいろいろな機会があるようですね。

Q3

あなたは学校以外で外国人と交流する機会がありますか？
またそれはどのような場面で行われますか？



第1位 バイト先

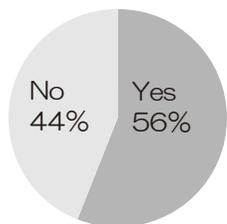
第2位 友達

第3位 寮

- ・ どうか、同志社生はそれぞれ国際交流する機会を得ているようです。私も見習いたいところです。

Q4

あなたは留学をしてみたいと思いますか？



<理由>

Yes

第1位 異文化体験したい

第2位 語学習得

第3位 視野を広げたい

No

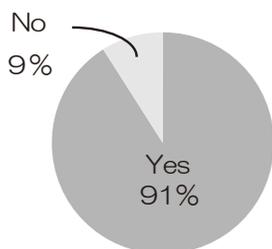
第1位 お金がない

第2位 興味がない

第3位 時間がない

- ・ 印象に残ったこととしては、“留学に行ってみたいけど、環境が整っていない”という意見が多かったこと。その点、GC学部は恵まれていると言えるでしょう。しかし一方で、日本語でしっかり専門分野を学びたい”という意見も見られたことから、自分が留学や外国語を通して何を学ぶのかははっきりさせておかないと、留学に足をすくわれかねないと感じました。

Q5 これから英語・中国語は必要だと思いますか？



<理由>

Yes

第1位 国際化に伴う共通語の必要性

第2位 市場の規模が大きい

第3位 就職に有利

No

第1位 言葉はあくまで道具

第2位 自分には必要ない

- ・やはり、共通語として英語・中国語を重要視する傾向がありました。しかし、反対意見にもあるように、外国語を習得してどうするかが私たちの課題でもあるようです。

Q6 グローバル・コミュニケーションと聞いて、何が思い浮かびますか？

- ・国際的に友好関係を築く
- ・世界で活躍できる言語力
- ・異文化交流
- ・ビジネスにおいて重要なこと など

グローバル・コミュニケーションとはなんなのか、それは私たちの学部の命題でもあるでしょう。

アンケートに協力してくださったみなさん

学部

文学部 (13) 政策学部 (8) 経済 (6)
社会学部 (8) 法学部 (17) 神学部 (4)
商学部 (12) 理工学部 (5) 文化情報学部 (3)
スポーツ健康科学部 (5) 同志社女子・学芸学部 (1)

学年

1年 (32) 2年 (23) 3年 (15) 4年 (12)
ご協力ありがとうございました。

いかがでしたか？ 自分の考えと比べて、違和感がありましたか？

私がこのアンケートで最も印象に残ったことは留学に関する考え方です。留学しないで専門分野を母国語でしっかりと学びたい、外国語は自分には必要がない。留学を前提とする GC 学部にとっては少々新鮮な意見です。そして、これが GC 学部と他学部の大きな意識の違いだと思います。

しかし、こういった意見は私たちにある種の明らかにしておくべき課題を突きつけてくれます。外国語の習得はこの学部にとって目的なのでしょうか。それとも、手段なのでしょうか。もし、手段だとするならば、私たちは外国語をもって何をすべきなのでしょうか。

きっとそれは一人ひとり違うことなのでしょう。「グローバル・コミュニケーション」という名前を聞いて連想することが、みなそれぞれであることはこのアンケートからでも分かります。それならば、この GC 学部を志望する人間の夢も希望も様々であることは想像に難くありません。共通していることは、日本を含む「世界」に興味があるということ。私個人はそれで十分だと思っています。あなたは「世界」に興味を持って、どんなことをするつもりですか？ あなたのすることとグローバル・コミュニケーションはどんな関わりを持っていますか？

その課題を解決するために、是非、最後に次の質問にお答えください。

グローバル・コミュニケーションと聞いて、何を思い浮かべますか？

あなたも自由に思い描いてみてください。



Real GCs' Voice

今回、私たちは2011年度新設学部であるグローバル・コミュニケーション学部所属の2人の先生と日本語コース所属の2人の中国人留学生、合わせて4人の方に、日頃の大学生生活だけではうかがい知ることのできない素顔に迫るべくインタビューを行ってきました！

質問内容は、当学部の学生が知りたいことや興味を持っていることを事前に募ったものです。

I. 先生

- i) 吉田 優子 先生 (英語コース)
- ii) 中西 裕樹 先生 (中国語コース)

II. 留学生

- iii) エンキンさん・チェンさん (日本語コース)

① 吉田 優子 先生

—「先生は、普段の一日をどのように過ごされているのですか？」

吉田先生

「それは本当に人によると思いますが、基本的には、授業のある日は授業に来て、授業と会議に合わせてどうやって一日を割り振ろうかと考えています（大部分は授業の準備と様々な業務）。例えば、春学期に英語コース

で実施した Introduction to English Speaking Culture の講義は、週末に結構時間をかけて用意したりしていましたね。それに、やっぱりみんなの顔を見てから色々考えたいことが出てくるから、ちゃんと前年度から用意はしているのですが、実際みんなに会ってからいろいろ考えたことも多くて……。で、あとはもちろん大学の先生って教育と研究の二本柱で生きているから自分のしたい研究を時間を見つけてする、といった感じですね。だから授業や委員会で忙しいときはなかなか研究に時間を使えないですね。ちょっと辛いけどね。夜遅くまで起きていることも多くなってしまふことが多いです。」

—「では、学生の時の夢は何でしたか？」

吉田先生

「私、通訳になりたいって思ってたかな。あとはイギリスに住もうって思っていました。」



— 「なぜイギリスに住みたいと思ったのですか？」

吉田先生

「こういう人は、割と多いと思うんだけど British Rock が好きで、私の世界が Britain 一色だったから、それが元で中高生の時はイギリスの文化や大好きな紅茶のこととかばかり調べていましたね。初めてイギリスに行ったのは高校生の時に3週間。それからむこうの大学院に行って、言語学の学位を取りました。今では立場が逆になって、ロンドン大学の後輩が同志社に留学して来て私の地域言語文化論（日本の言語）の授業を取っていますよ。とにかく英語や言語が好きで、どうして私はこんなに言語が好きなんだろう、また Shakespeare の頃からどうしてこんなに英語が変わったんだろう、等と考えたら言語の仕組みが知りたくなくて、“人間が言語を習得し話すようになる能力”にも興味を持ち始めて言語学を専攻することにしました。」

— 「好きな異性の芸能人はいますか？」

吉田先生

「(写真を出しながら) Damon Albarn って知ってますか？ Blur っていうバンドの人なんだけど。」



— 「かっこいいー！イギリス人ですか？」

吉田先生

「そうそう。この人の歌は、私にとってわかるものがあるんです。歌を聴くと、ああ、もう言わないで！わかってるから！って思うくらい。(笑) 若いときよりも今の彼のほうが好きね。外見っていうよりも、感性ですね。」

— 「普段、料理はされますか？」

吉田先生

「時間があればしますよ。イタリア料理とか、ワインに合わせてオリーブオイルを使った地中海料理が好きですね。オリーブオイルを使い分けるのも楽しいです！パスタが大好きです！」

— 「尊敬している人はいますか。」

吉田先生

「自分の父親ですね。父親のことは研究者としても、尊敬しています。研究の姿勢や、彼の誠意には感心しています。」

— 「GC の学生についてはどう思いますか？」

吉田先生

「みんな本当に可愛くて、I love you all って感じですよ。SA に行っちゃうって思うとすごくさみしいです。でも、かわいい子には旅をさせよって感じね。」

— 「GC 開設にあたり苦労したことはありますか？」

吉田先生

「いっぱいあるけど、やっぱり、1年間の留学をカリキュラムに組み込むことのセットアップが一番大変でしたね。でもみんなが一生懸命頑張ってくれていて嬉しいです。」

— 「では最後に、先生は、“グローバル・コミュニケーション” という言葉をどう理解されていますか。」

吉田先生

「すごく今の世の中にとって大切なことで、ひとりひとりが自分勝手に生きたら色々な問題も解決できないでしょ。だから、もっと本当の意味でのGCができるようになったらいいですね。で、大事なことは、外を見ることによって自分の元々の国や文化の大切さが分かることです。私自身もイギリスに行って初めて日本の良さに目覚めて、価値観が違うから面白いし、生まれ育った日本と京都のことにすごく目が向きました。Local な文化や価値観を大事にしながら世界的視野を持つ、ということが Global Communication の醍醐味ではないかな。」

吉田先生は、終始笑顔で快くインタビューに応じてくださり、先生の優しさや、私たちのことを考えてくださっていることが大変よく伝わってきました。

吉田先生、貴重なお時間を割いてまで長い時間で協力いただきありがとうございました！！

Damon Albarn の写真は http://www.musicrooms.net/files/artists/damon_albarn_512289123.jpg より。

吉田 優子先生

グローバル・コミュニケーション学部 英語コース担当

専門分野：理論言語学（音韻論）・社会言語学・音声学

代表的著作：On Pitch-Accent Phenomena in Standard Japanese (1999)。ロンドン大学 (SOAS) 博士論文集第

1号として出版され、今なお London 大学 (SOAS) 音韻論の教科書／参考書の一つとして読まれています。日本語のピッチ・アクセントの理論研究で、現在私が行っている日本語（そして英語）の方言研究の基礎となっています。



② 中西 裕樹 先生

—「先生のプライベートについて少しお伺いしたいと思います。休日は何をして過ごすことが多いですか？」

中西先生

「今年はあまり行けなかったのですが、家族とよく一緒にキャンプに行きます。」

—「好きなスポーツはありますか？」

中西先生

「観るのは野球かな。ずっと子どもの頃から広島を応援していたんですけど、今は阪神を応援しています。甲子園にも行きますよ。でも、高校野球は観てられないよね。なんか、かわいそうでしょ。ピッチャーがずっと投げきって疲れているし。学生時代は陸上をしていましたね、短距離です。」



—「趣味・特技を教えてください。」

中西先生

「趣味……趣味はビールを飲むことです！下手の横好きなのですが。（笑）量は少ないですが、いろんなビールを飲みます。」

—「学生時代の将来の夢は？」

中西先生

「すごく小さい頃、小学生の頃はお喋りだったので、テレビのアナウンサーになりたいと思っていたんですよ。でもだんだん口数が少なくなってきて中学生・高校生ぐらいでは外交官になりたいって思っていました。そして大学に入って、外国に行きたくなったんです。それで大学に6年間在籍し卒業してから中国に行って、でまた大学院に行くことになって。この世界に来ることになりました。まあ、だから小さい頃からずっと思っていたことは、外国に行きたいっていうことですね。」

—「好きな異性の芸能人は？」

中西先生

「しょこたんです。そんな質問があると聞いたので家族会議をしてきました。（笑）しょこたんってポケモン好きでしょ、日曜日の朝とか子どもとポケモン番組見てるから。」

— 「GC の学生についてどう思いますか？」

中西先生

「素直で可愛いですね。明るいな、ハキハキしていて。とても期待しています。今みんなすごく楽しそうにしてくれているし、これからも楽しく過ごしてくれたらいいな、とも思います。」

— 「尊敬している人はいますか？」

中西先生

「大学院、北京大学の先生ですね。いろいろ大変なこともあったんですけど、自分の仕事を着実にする人で本当に尊敬しています。この先生の影響で、中国の方言を研究したいな、と思うようになりました。北京大学在学中に、僕が日本人だからといって、現地の人に過去の戦争のことを話題に出されたときも、その先生は日本軍との戦争を実際に経験したにもかかわらず、すかさず僕のことをかばってくれたり、なんていうこともありました。非常に感謝しています。」

— 「先生って、いつから髪を伸ばしているんですか？」

中西先生

「だいたい2009年の冬、2月くらいですね。結えられるようになったのは1年半、2年弱位ですね。伸ばしてみたいっていう思いがずっとあったんですよ。けど、もう少しというところでいつも切ってしまうって。でも今回はたまたまうまく行ったんです。パーマをかけたこともありますよ。髪を伸ばすことによって、自分が体験してみなきゃわからないことが見えました。女の子が髪を抑えながらラーメンを食べることとか、昔の人が夏の暑いときに髪の毛を箱の中にしまっておくこととか。」

— 「では最後に。“グローバル・コミュニケーション” をどう理解されていますか？」

中西先生

「いろいろな解釈があると思うのですが、世界の様々な人々と共存していく手段、というふうに考えています。」

忙しいスケジュールの合間をぬってのインタビューでしたが、中西先生はにこにこ、快く私たちのインタビューに応じてくださいました。ここには書ききれませんが、先生の好きな食べ物や、プライベートに迫った情報もたくさん教えていただきました。短い時間でしたが、先生の気さくで良い人柄のおかげで私たちもリラックスして打ち解けてお話をすることができました。中西先生、本当にお忙しいなかご協力いただきありがとうございました！！

中西 裕樹先生

グローバル・コミュニケーション学部 中国語コース担当

専門分野：フィールド言語学・歴史言語学

ことばの歴史や変化に関心があります。中国広東省を主なフィールドとして、まだあまり知られていない言語や方言の現地調査を行い、その結果に基づいて文献には残っていないことばの歴史を再構することを目標としています。今までいちばん長い期間調査をしているのは「ショオ語」という言語ですが、この言語は話者が1,500人ぐらいしかいません。ほとんどの人が現地の中国語方言や共通中国語との多言語使用者です。今後は、この消滅の危機に瀕した言語をできるかぎり正確に記録し、可能であれば次代に引き継いでいくための方策を現地の人々と協同して考えてゆくのも重要な仕事となりそうです。主な著作には『畚語海豊方言基本詞彙集』（京都大学人文科学研究所、2003年）があります。



③ チェンさん・エンキンさん

— 「では始めます。いきなりですが中国での歴史教育についてです。」

チェン

「答えられる範囲で話していきます。」

— 「いつ日中戦争のことを知りましたか？またそのとき何を感じましたか？」

チェン

「小学校の時に学校で教えてもらいました。初めてその話を聞いたとき、日本のことをとてもひどいとは思いませんでした。それと同時に中国がかわいそうに思いました。今では『昔は昔。今は今。』と思えるようになりましたが。それでも歴史問題が政治的に利用されていると感じますし、日常生活の中でも反日などを見ると、歴史問題はまだあるなと感じます。」

— 「『昔は昔。今は今。』と中国人みんなが思っているのですか？」

チェン

「地域によって異なります。特に南京や、東北の人には日本のことを嫌いな人が多いと思います。それは満州事変や南京大虐殺があったからだだと思います。それでも多くの人が日本に来ています。」

—「その人たちは日本に来てても嫌いなままですか？」

チェン

「はい。日本の上司などとの上下関係が嫌だそうです。確かに中国は儒教の国ではありますが、個人の意見は上司であろうとしっかりと言います。でも日本ではそれができないので、嫌いな人が多いみたいです。」

—「では日本に留学に来た理由を教えてください。」

エンキン

「私は浜崎あゆみのファンです。そこから日本の文化に興味を持ち、もっと知りたいと思って勉強しようと思って日本に来ました。まず1年目は日本に語学留学して2年目（今年）から同志社大学に通っています。このような形で日本に留学する人は多いです。」

—「では、日本に来て、日本について考えが変わったことはありますか？」

チェン

「以前よりも『昔は昔。今は今。』という考えが強くなりました。」

—「特に何に影響されましたか？」

チェン

「日本の文化です。特に漫画・アニメ・アイドルですね。小学校の時、親と一緒に、日本に来たときに知ったのがきっかけです。私は嵐のまつじゅん（松本潤）の大ファンです。彼が出演している『花より男子』や『ごくせん』などのドラマも見ました。小学校の時はコミックを毎月買っていました。」

—「日本に来る前とその後で、イメージは変わりましたか？」

エンキン

「イメージ通りでした。というのもさっきも言ったみたいに日本の有名人などが好きで、よく調べたりして知っていました。その中で日本のことが好きになって留学しようと思いました。」

—「中国人みんなが日本の文化を知っていますか？」

エンキン

「若者はほとんど知っています。でも年輩の方は知らないですね。」

—「では、中国の特徴を教えてください。」

エンキン

「人口がとても多いですね。あと学力はとても高いのではないかと思います。でも貧富の差がとても激しいです。」

チェン

「それは上海などの大都市でも言えます。子どもに食べ物をあげると寄ってくることもあります。」

エンキン

「一人っ子政策も大きな特徴ですね。私も一人っ子です。しかし、子どもができてしまってはしょうがないので、罰金を払えば産むことは産めます。」

—「食べ物に話を移します。日本の食について思うことは何かありますか。例えば牛丼とかどうですか？」

チェン

「牛丼は中国の文化にはないです。日本で食べましたが、おいしくないですね。」

—「すみません。(笑)」

—「そろそろ授業ですね。今日はいろいろ話してくれてありがとうございました。」

日中間の問題についてどう思っているかなど、なかなか聞けないような話まで聞くことができました。日本文化が好きで留学に来ている人も多いようです。

彼女たちは3つの言葉（中国語、日本語、英語）を操ります。私たちも彼女たちに負けられないように頑張ろうと思いました。



チェンさん (写真左)
エンキンさん (写真右)

◆日中比較文化論1◆中国文化をよりよく理解するために

ダージャーハオ

大家好！みなさんこんにちは。突然ですが、みなさんは、中国と聞いたとき、何を考えますか？「中国？ めっちゃ歴史ある国やっていうのは知ってるわ。漢方薬とかもいっぱいありそうやし、やっぱ1回は本場の小籠包とか北京ダック食べてみたいよなあ。それに、上海が最近発達してるって聞くし、万里の長城にも1回いっときたい気持ちはある。でもさあ。あれやん、中国ってこわいやん、いろいろさ。だって、鉄道事故があってもそのまま埋めちゃうんやろ？ 日本じゃ考えられへんよなあ。それに共産党とかもなんか怖い気がするなあ。」と、こんな声が聞こえてきそうですね。でも、そう考えているのはおそらくあなただけではありません。日中関係をめぐるさまざまな国際的事件ごとに、双方の国民の感情は揺れ動いているからです。

でも、おとなりさんである中国を、メディアを通じた姿しか見ないうちに「よくわからない怖い国」で片づけてしまうのはとてももったいない気がしませんか？ 現に、空前のK-POPブームにより、韓国のことを以前より身近に感じるようになった人は少なくないでしょう。

以下の文章を読むと、中国に対する見方が変わるかもしれません。そして、変わっていただければ嬉しいです。最初は個人のレベルでいいので、中国に対する誤解を解き、理解し、興味を持つと、よりよい日中関係が築かれるのではないかと思います。GC学部に入るまでは私も同じく抱いていた疑問を一問一答形式でまとめました。それでは、看一下儿吧（カンイ シニアバ 読んでみてください）！

- Q. 中国で報道される毒入り餃子や粉ミルク事件。さらには鉄道事故。中国人ってどうしてそんな国に住んでいても平気なの？
- A. あなたは、ある番組やニュースで、中国でおこった事件や、事件に対しての中国人の反応を見て「中国人ってこんな人たちなんだ」と思ったことはありませんか？ こう考えてしまうと、ほかの番組で中国人が映っていたとしても、つい「ああ、この人もさっきの事件に対してはこう思うんだろうな」とか「あんなに怖い事件をおこすかもしれない」と、思ってしましますよね。

実は、ここにお国柄ともいえる、考えかたの違いが根底にあるのです。相原茂『「感謝」と「謝罪」』より、興味深い内容を引用してみましよう。

「われわれ日本人が、たとえばサッカーアジア杯で騒ぐ様子を見ると、あれが中国人のすべてであり、全国民共通の感情だと誤解してしまう。この理由は、日本人が「一億総中流」で、ほぼ均質の国民感情を持つために、中国人も同じだろうと誤解してしまうのだ。しかし中国

人の考え方は違う。中国の上層階級の人々は、あのような騒ぎをおこす民衆を自分と同じ階級とは見ていない。日本と違って広大な中国は、内陸部と沿岸部で生活レベルは大きく異なるため、わたしたちはある出来事を見る際も特定の場における、特定の人々の行動と捉える必要がある。」

相原氏は、私たち日本人の考えには、無意識のうちに日本国民の均質性があらわれていると言及し、中国を観察する際に、一面だけから見るとは非常に危険で、多様な面から柔軟に見ることが大切だということを述べています。実際この学部に入ってから中国人とかかわる機会が増え、中国に関する質問をしたとき、ひとつの答えで返ってくることはまれで、大概「～な人もいるけど、～な人もいる」と返ってきます。これは事実を正確に述べようとしている姿勢だと感じます。その反応を見て、日本・日本人に対する見方が少し変わってきました。私は日本人はほどほどを良しとする気質があるように思います。どんな意見でも、突拍子もない個性的な意見を言うくらいなら、まわりに合わせて目立ちたくないという雰囲気のことです。これが相原氏の言う、「一億総中流」の感情の原因だと思います。周囲に合わせておく、というのは、身近な場面でも発見することができます。例えば関東の友達から、「大阪弁話す子って東京ですごくモテるんだよ」と言われたことがあります。今までは彼女に合わせて「へえ、そうなんや、嬉しいなあ」と言っていました。しかしこれからは「モテる子もおるけどモテへん子もおると思うで」って言ってみようかな。私も事実を正確に述べる練習をしてみようと思います。(笑) ただ、周囲に合わせる技術というのは一方的に批判の対象になるのではなく、日本人ならではの気遣いが世界的にも評価される場面も多々あります。ここでも、一面だけを取り上げて議論することの危険性があらわれています。

つまり、この問いの答えは、中国人はきっと「毒入りの餃子や粉ミルクが出回っていたのは事実。でもそうでない安全な商品だってたくさんある。それを見極めて悪い面だけを見ないのが生きる知恵というものだ。」と考えていると私は思います。

Q. 観光地などで見かける中国人って声が大きいいし、早口で圧倒される気がするけど、日本とどう違うの？

A. 中国語の発音は同じ音に対して4つの声調（イントネーションのようなもの）がつかます。日本語は雨と飴、橋と箸のように単語ごとにアクセントが決まっていたり、文章全体で抑揚がいたりしますが、多少イントネーションが違っていても、意味がまったく分からないことはありません。しかし中国語では単語より小さい単位である音節ごとに正確に声調を発音しないと相手に伝わりません。中国語はふつうに話していても抑揚が多いため、早口に聞こえるのかもしれない。それに活気のある町で話すには大声でないと全く聞こえません。中国ではまわりも大声です。だから、街で大声で話している中国人に対しても不快感を抱かずに、中国に生きる人たちの当然のなりゆきであることを理解していただきたいです。ちなみに私たちは授業でも、中国で生活することを想定しなるべく大きく発音するように心がけています。

以上二つの問答は中国人の知り合いがいなくて、町やテレビで見かける中国人に対するイメージをもった人へのアドバイスでしたが、次は中国人の友達や知り合いがいて、少なからず彼らとかかわったことがある人が持つであろう疑問を解決していきます。

Q. 中国人におみやげを渡したのにその場で開けてくれなかった！

A. 中国人の習慣として、その場で贈り物を開けることはしません。その場で開けてみるように勧めることも、中国人からすると、本来は礼儀に反するのです。それは中国人の家に呼ばれて、手土産を持参したのにその場で食べてくれなかったという話にもあてはまります。中国人は、自分が人を招待したのに、その人の手土産をあけてしまうと、自分はその人のために何も用意していなかったと思われると思います、出さないのです。日本でも、贈り物をもらったときの反応について私の先生に尋ねてみると、本来は頂いた人の前では開けないと言っていました。しかし私の友達に尋ねても、そのような礼儀の教育を受けた人は少数でした。時代の流れによって、礼儀作法も少しずつ変化しているように思います。最近では、自分が用意した食べ物と、招待された人が持参したものを同時に出す家庭も増えたかもしれませんが、根底にはこういう考えがあることを事前に知っておくと、困惑せずに済むかもしれません。ちなみに、もし中国人に贈り物をするようになった場合、白色の包装は避けましょう。中国で白は葬儀の色であり、葬式には白い花を飾り、白い服装をするからです。目立たないふつうの買い物袋に入れて持参することがベターです。中国人は相手から贈り物を差し出されたら、一般的には必ず婉曲に断る習慣があります。これは拒絶しているのでも、ましてうれしくないという意思表示をしているのでもない、固い決意で相手に受け取ってもらいましょう。中国にも謙遜がある文化は日本と似ていますね。

Q. 中国人の友達がよくおごってくれるのはどうして？

A. 日本人同士で食事をする場合、会計は割り勘がふつうで、自分が食べた分は自分で払うのが基本です。しかし中国では「おごる」「おごられる」という関係がふつうなので、食事が終わって会計するときには、自分が払うと争います。相手との待ち合わせの際に、食事の時間帯を含む時間を指定したら、自分がおごるということと同じです。もっとも、若い都会の人の間では「AA制」と呼ばれる、いわゆる割り勘が登場しつつありますが、やはり基本はだれかが払うという図式です。また、中国人は「面子（メンツ）」を重視する民族なので、おごるといってやっているのに、何度も断ったりすると、相手の顔に泥を塗ることになります。素直にお礼をいうほうが良いでしょう。

以上のQ & Aはいかがでしたか？ほんの少しの情報ではありますが、今後私たちがより一層中国との関係を深めていくにあたり、これらがみなさんにとって有益になることを願ってやみません。私自身、この情報はすべて日本で得たものです。ですので実際に初めて中国に行く際に、日本で手に入れていた情報とはどういう点で違うのか、またどのような新しい発見があるかをこの目で確かめられることを楽しみにしています。この記事が、みなさんの今までの先入観や誤解を解き、新しい国際交流をはじめていただくきっかけになれば嬉しいです。

参考文献：相原茂『「感謝」と「謝罪」』講談社、2007年。

周国強『中国年中行事・冠婚葬祭辞典』明日香出版、2003年。

文責：中国語コース 1回生 後藤友莉

◆日中比較文化論2◆日中のトイレに見る多様性

「中国のトイレに行くとき、トイレットペーパーを忘れたらどうすればいいの?」「中国のトイレってドアがないって本当?」私は、日本に来てからこのような質問を数知れず聞かれ、どう答えたらよいかわからず、常に沈黙するしかなかった。

実をいうと、大都市で生まれ育った私は、出かけたときのトイレの不便さを感じたことはない。家では日本と同じような便座が使われており、外出先でも無料の公衆トイレはいくらでもある。だから、なぜ日本の友達が中国のトイレに対してそんな印象を持っているのかが興味深かった。

私は中国人だが、今までトイレに対して何の疑問も感じたことがなかったので、手始めにネットで検索してみると、日本との違いを強調する傾向があり、中には見るからに中国のトイレが不潔だと決めつけている表現もあった。それらはモンゴル、山西省の農村、チベットなどのトイレである。確かに、溝や穴が並んでいるだけのトイレもあれば、壁やドアのないところもある。(白族民居のトイレ→)なるほど、これを見る限りでは、中国に旅行したくても躊躇してしまう日本の友人の気持ちがわかるというものだ。この友人は中国の日本とは違いすぎるトイレの文化を不安に思い、私に相談してきたのだろう。では、実際の中国のトイレがどうなっているのかについてここでお話ししようと思う。



故郷の北京を思い返してみると、オリンピック開催までに5,200か所の公衆トイレが作り上げられ、障害者トイレや荷物を置く棚も整備された。(北京の移動エコトイレ→)高級ホテルやレストランでは、トイレ内で音楽も流されているし、ハンガーまでも用意されている。以前は女性用のトイレが少なく、常に入口で女性が並んでいる光景を目にしたが、その問題も大分改善され、今や衛生的で通風もよいつくりとなっている。



にも関わらず、何か足りない気がする。そうだ、中国にはトイレットペーパーが時には設置されていないことだ。だから、外国人観光客はトイレに行くとき、大量のポケットティッシュを自分で持参することがもはや常識となっている。環境にやさしく、汚水が高度な技術で自動的に処理され、農業に再利用するトイレもできている一方で、なぜ万人に必ず必要であるはずのトイレットペーパーが無いのかは、中国人の私でもあまり理解できない。

実は、故郷では毎日自分でトイレットペーパーを準備したり、忘れたら友達に借りたりすることを当然と思っていたので、トイレにトイレットペーパーがないことの不便さに気が付かなかった。確かに、中国ではトイレットペーパーを備え始めているところはどんどん増えている。特に北京や上海などの大都市の高級ホテルでは、質のいいペーパーも広く使用されている。しかし、町の公衆トイレや地方のトイレでは、ないところはまだまだ多いという。トイレの入り口で売っているところもたまにあるが、やはり不便だ。

来日してすでに2年がたった。どこにいても、トイレットペーパーは必ず設置され、ホテルやレストランに至ってはペーパーの端を三角形やハート型に折っているところまである環境に慣れると、中国のすべてのトイレにも、トイレットペーパーを無料で設置すべきだと切実に感じている。

トイレトペーパーが無いことは、確かに改善すべき問題だが、では「中国のトイレには壁やドアがないのか？」という疑問はどうだろう。穴や溝だけで、壁もドアもないトイレは確かに今でも存在する。しかし、そのようなトイレは、かなりの田舎か一部の地方都市に限った話である。都市の中にあつたとしても、裏通りにある一部の古い公衆トイレか、古い長屋に住む人たちの共同トイレの場合のみだろう。ほとんどの観光地では水洗トイレが完備されているし、壁もドアもちゃんとある。最近の中国は昔よりもはるかにきれいになっている。だから、昔のイメージのままの中国のトイレを不安に思い、中国旅行を躊躇することはないと思う。

今の中国は、まだ手探りしながら発展している状態だ。国土も広い上に、人口や環境問題などの深刻な問題もあるから、各地方のバランスをとりながら成長を図ることは容易ではない。このような格差のことを考慮すると、一つ星から五つ星のホテルの中には、粗末なトイレもあれば、日本を凌ぐほどの高級トイレも存在することが理解できるだろう。

(重慶の高級ホテルのトイレ→)



中国国民全体の観念や生活習慣がより進歩すれば、日本のように擬音装置から暖房便座まで豊富な機能が搭載され、便座消毒剤やベビーベッドまで配置される心配りのあるトイレもどんどん広がっていくのではないかと思う。トイレのことだけでなく、中国はいろいろな方面で日本を見習うべき点があり、それらは次第に改善されていくべきだ。しかし一方で中国のトイレが日本より発展していないと思う人は、日本でも農村部に行くと多様な形態のトイレがあることを思い出してもらいたい。日本の農村部のトイレを考えたとき、果たして不衛生だとか遅れているとか思うだろうか。私はそうは思わない。古くから日本は尿尿を肥料として有効活用し、生物のライフバランスを保ってきた。これは汚いことでもなんでもなく、世界に誇るべきリサイクルの先駆けである。それなのに戦後、在留軍らによって尿尿を利用する農作は不衛生だと定義され、トイレの水洗化が進んだ。一気に清潔志向になった日本人は今や世界でも屈指の清潔主義民族になり、自分たちとは違う文化のトイレを理解できないと思う人も出てきてしまった。結局は中国だけでなく、日本にも、また世界各国にも清潔なトイレも、昔からのスタイルを守っているトイレも存在するのだ。

よって、物事をひとつの側面だけから見て、全体を判断したり、不必要な心配を招いたりすることはできるだけ避けたい。この点を理解してもらえれば、日中両国の間を往来する観光客もだんだん増えていくとともに、誤解も減っていくのではないかと考えられる。

文責：日本語コース 1回生 劉瀟瀟
中国語コース 1回生 後藤友莉

イギリスコメディ―視聴のすすめ

突然だが、私はお笑い番組を見るのが昔から好きだ。なぜなら、お笑い番組を見ると自然と笑顔になり、私に元気をくれるからである。今まで私は日本の漫才から海外のコメディ―までいろいろなTV番組やビデオ、DVDを見てきた。今回、記事を書くにあたって私は読者のみなさんに“お笑い”の面白さを伝えたいと考えた。このような理由からコメディ―についての記事を書いたのだが、なぜ「イギリスコメディ―視聴のすすめ」というタイトルにしたかという、イギリスのコメディ―を見ることによって海外と日本のお笑いを比較できるだけでなく、海外のジョークについて理解を深め、さらに英語の習得にもつながるので是非イギリスのコメディ―を見てほしいと思ったからである。

では、初めにイギリスと日本のコメディ―を比較した時、イギリスの笑いには「皮肉」が多いとよく言われる。例えば、BBCで2003～2005年まで放送された“Little BRITAIN”はギャル風女子高生、肥満気味のダイエット・プログラム講師などを皮肉たっぷりに描いている¹。実は日本でもNHKで皮肉の利いたコメディ―を放送しているが、“Little BRITAIN”に比べるとそれほど強烈ではない。もし、日本でそのような強烈なコント番組があったとしても民間放送局で放送されるだろう。イギリスは斬新な事をする国だと思った。私自身も授業で実際に“Little BRITAIN”を見たが、話に出てくる英語が多少分からなくても十分面白かった。

一方、日本のコメディ―はと言うと、お笑いコンビが出てきて漫才をするというネタ番組が減少し、代わりに「おバカタレント」と呼ばれるタレントが起用されている番組が増加傾向にある。皮肉の利いた事をいうお笑い芸人はいるものの、“Little BRITAIN”のような番組はほとんど放送されていない状況だ。このように、イギリスのコメディ―は皮肉の利いたびりっとした笑いが多いのに対し、日本のお笑いは皮肉の利いていないぬるい笑いが多いと思う。

このようにイギリスと日本のコメディ―に対する世間の風潮は一見対照的に見えるが、実はイギリスでも日本でも人気があるイギリス生まれのキャラクターがいるのだ。それが、“Mr. Bean”である。Mr. Beanとは、ローワン・アトキンソン演じるキャラクター兼番組名である。そして、いつも彼の周りでは事件が起こる。なぜなら、彼自体が不可解な面白い行動を取るからである。ほとんど、彼は話さないのにもかかわらず、その奇妙で面白い行動で見ている視聴者を楽しませる。日本でも、1990年に初めて放送されてから人々の人気を20年以上経った今でも集めており、Mr.Beanの映画も1998年と2008年に日本でも公開された²。ちなみに、私もMr. Beanのファンの1人であり、小さい頃からビデオをよく見ていた。今見ても彼の面白おかしい行動に笑わされる。

では、なぜMr. Beanが日英両国で人気になったのか、私なりに理由を考えてみようと思う。まず、第1にMr. Beanのネタは言葉がほとんどない為、誰が見ても分かりやすいという事である。「サイレント映画の流れを汲んだ視覚的な笑い」³、つまり人間の基本的な感情である喜怒哀楽をBean自身が体全体で表現しているからこそ、多くの人がおもしろいと感じるのだと思う。次に、Mr. Beanは奇妙な行動を除けば、普通のどこにでもいそうなおじさんであるという点である。彼の基本的な服装はグレーのスーツに赤いネクタイというサラリーマンの一般的な服装である。スーツやシャツにネクタイを合わせるサラリーマンの服装は日英で共通している。そして、サラリーマンという職業は日英ともかなり多い。このようなサラリーマン風の人が面白い行動をするからこそ、視聴者は彼に対して親近感や共感を持ち、彼のキャラクターが好きになるのだと感じた。最後に人気の理由として彼の本当の人物像とMr. Beanのキャラクターとのギャップが大きいということがあげられると思う。ローワン自身はイギリスのオックスフォード大学で理学修士を取得

し、その後劇作家、小説家、コメディアンと幅広く今でも活動しているのである⁴。私はテレビなどを見ていて、外見と中身のギャップが大きい人は日英共に好まれると感じる。具体例として、まず日本の場合、北野武が挙げられる。彼は「ビートたけし」として毎日のようにテレビに出演し、コメディアンとして活躍している。しかし、彼は「北野武」として映画監督もこなし、彼の作品は多くの賞を受賞して、彼は日本だけではなく世界でも高く評価されている。一方、イギリスでもギャップの大きい人が好まれている。日本でも有名なチャールズ・チャップリンだ。彼は1889年にロンドンで生まれ、俳優として活躍した。ここまでの情報は一般的に世に広く知られている。しかし、彼は俳優のみならず、映画監督、音楽も自ら手掛けたマルチに何でもこなす人だったのである。そして、彼の死後35年経った今でも世界中の人気を集めている⁵。しかも、ローワン自身、Mr. Beanのキャラクターはチャップリンの影響を受けているという。このような秀才がああMr. Beanを演じているのだから、ネタの面白さはもちろん、そのギャップも人気の秘密だと思う。

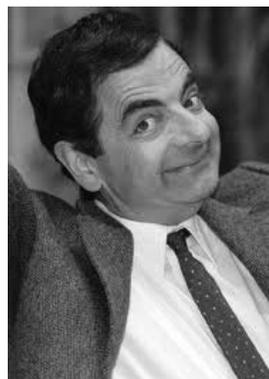
ここまで、Mr. Beanの人気の理由について色々と語ってきたが、私がなぜここまでイギリスのコメディを推すのかというと、私はイギリスのコメディを見ていて老若男女すべてが納得する笑いがあると感じるからである。Mr. Beanのような「視覚的な笑い」なら子供が見ても分かりやすい。しかし、“Little BRITAIN”は見て分かるものだけでなく、世の中を風刺するようなブラック・ユーモアも話の中に盛り込まれているので、ある程度の知識を持った大人でないと分かりにくい。このように、イギリスでは多様なコメディ番組が放送されているため、様々な年代の視聴者に対応できる点が私にはいいと思う。

では、なぜイギリスのコメディは「誰が見ても納得できる笑い」になったのだろうか。イギリスにはイングランド人、スコットランド人、ウェールズ人、インド系、アフリカ系、アラブ系や華僑など様々な民族が集まった多民族国家である。これだけの様々な人たちをイギリス国民として1つの共同体にするには共存が大切になってくる。共存するためには政治や宗教、文化など様々な面でお互いが納得していく必要がある。そのような中でコメディを生み出す訳だから、誰もが納得できる笑いでないといけな。こういう理由からイギリスのコメディは「誰が見ても納得できる笑い」が多いと思う。

この世の中には色々な性格の人がいる。好みも人それぞれだ。「日本のお笑い番組しか見ない」という人もいだろう。しかし、たまには海外のコメディを見てみるのはどうだろうか。海外のコメディを見る事によって異文化を学ぶことができるし、英語を勉強することもできる。さらに、自国のお笑いと比較することによって、自国の笑いについて新たな発見をすることができるかもしれない。



Little BRITAIN



Mr. Bean

文責：英語コース 1 回生 前田 響

(Endnotes)

- 1 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%83%88%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%96%E3%83%AA%E3%83%86%E3%83%B3>
<http://blog.livedoor.jp/tellmesaka0607/archives/306383.html> (両方ともに 2012/2/13 閲覧)
- 2 <http://ja.wikipedia.org/wiki/Mr.%E3%83%93%E3%83%BC%E3%83%B3> (2012/2/13 閲覧)
- 3 <http://ja.wikipedia.org/wiki/Mr.%E3%83%93%E3%83%BC%E3%83%B3> (2012/2/13 閲覧)
- 4 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%AF%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%82%A2%E3%83%88%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%B3>
(2012/2/13 閲覧)
- 5 大野 裕之著 『チャップリンの日本』(日本チャップリン協会、2006年)とデイヴィット・ロビンソン著 『チャップリン(下)』(宮本 高晴・高田 恵子訳 文藝春秋、1993年)を参照した。

～GC学部の学生が考える「グローバル・コミュニケーション」とは～

GC学部一期生の皆さんに

「あなたが考える グローバル・コミュニケーションとは？」

という質問をしてみました！

「使う言語は何であれ、**個人と個人の対話、理解**がグローバル・コミュニケーション」

「どんな人がどんな状況にいても、互いを理解しあい、お互いに向上できるコミュニケーション」

「**世界を軸に**物事を考えること」

「**世界で通用する語学**」

「言語だけでなく、文化や歴史を理解したうえで成り立つもの」

「世界のつながり」

「相手のバックグラウンドを理解しつつ自分の主張をしっかりとできるコミュニケーション」

「地球の反対側にいるような人とさえもコミュニケーションをとれること」

「世界中が通じ合うことができることを実感することができる」

「さまざまな地域のアイデンティティーを確立するのを促進するひとつのツール」

「国や人種を超えた交流」

「国籍、民族など分け隔てのないコミュニケーション」

編集後記

私達編集委員会は、2011年度新設学部であるグローバル・コミュニケーション学部の魅力や中身をより多くの人に知ってもらいたいという一心で集まった当学部第1期生により結成されました。当誌発刊にあたって数々の会議や試行錯誤を経て、今回大変嬉しいことに私たちの意をこうして形にすることができました。至らない点も多いかと思いますが、当誌を読んでもGC学部の学生が私たちの学部について多くの情報を共有できるようになるとともに、学部外の方々にも興味や関心を持っていただけたら嬉しいです。

2011年度 *Cosmos* 編集委員会

英語コース 前田 響・大川 貴弘・大槻 容子・眞田 翼・
嶋津あすか・菅井 翼・高井 大智・谷口 綾・
上野 叶恵
中国語コース 後藤 友莉・家田 昇悟・鍵山 裕香・小椎尾優花
日本語コース 倪 暁剛・劉 瀟瀟



グローバル・コミュニケーション学会 運営編集委員会・役員会

Bettina Gildenhard・窪田 光男・Terry D. Ochs
須藤 潤・内田 尚孝・郭 雲輝・山本 妙

Cosmos 第1号

2012年3月23日発行

発行 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学グローバル・コミュニケーション学部内
Tel (0774) 65-7491 Fax (0774) 65-7069

編集 2011年度 *Cosmos* 編集委員会
グローバル・コミュニケーション学会 運営編集委員会

印刷 株式会社あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15

